

社会的質研究の理論的基礎：批判的实在論（1）

福 士 正 博

I はじめに

「私たちはどのような社会に生きているのだろうか」。社会的質研究が問うのはこの一点である。この問いを認識論としてではなく、存在論として明らかにすること、すなわち、どこにあるのかさえわからない社会という存在が私たちの生き方とどのように関わり、対峙しているのかを明らかにすることである。この問いに正面から取り組むには、社会と私たちとの関係を深く掘り下げることのできる方法論を必要とする。個人主義が方法論的个人主義に、集合主義（全体主義）が方法論的集合主義と結びついているように、社会的存在論にはそれに相応しい説明的方法論というものがある。存在論と説明（認識論）は一体のものである。社会と私たちとの関係を存在論として追究するという要請からすれば、その方法論は方法論的实在論（methodological realism）ということになる。それでは、社会的質研究に最も相応しい思想とはどのようなものなのだろうか。

社会的質研究の理論的基礎はロイ・バスカーを創始者とする批判的实在論（critical realism）にある。それでは、社会的質研究と批判的实在論はどこで、どのようにつながっているのだろうか。社会的質は言うまでもなく、「社会的」と「質」という二つの言葉が合わさった合成語である。社会的質研究は、社会に関わる理論構成と、社会の質の評価に関わる実践的研究という二つの研究領域を持っている。前者は批判的实在論に準拠して理論的組み立てが行われているのに対して、後者は社会的質研究が独自に進めてきた社会の質の評価領域と関わっている。社会的質研究の理論的成果に基づいて行われる質の研究は、方法論的个人主義に基づいて行われてきたこれまでの生活の質研究の問題点を指摘し、方法論的实在主義に基づいて新たな地平を築こうとしている。「私たちはどのような社会に生きているのだろうか」という問いは、言い換えれば、「私たちが営む社会はどのような質的水準にあるのだろうか」、すなわち生活世界を生きやすさ（生きづらさ）という日常の視角から具体的に問題にすることである。社会的質研究の目標はこのように、社会の質とその水準を明らかにすることにある。社会的質研究は、このすぐれて実践的な課題を、これまでの生活の質研究を批判的に考察し、新たな地平に引き上げようとしている。

1990年代後半からヨーロッパを起点に行われるようになった社会的質研究は、当初、「社会的ヨーロッパに相応しい社会政策とは何か」というごく限られた課題を追究していただ

であった。しかし、その後、この課題に正面から取り組むには社会政策の領域だけでなく、「社会とは何か」という普遍的な問題と向き合う必要に迫られ、研究課題と方法論は大きく変化した（IASQ 2020）。そこで求められたのは、この変化に対応できる思想と方法である。社会的質研究とロイ・バスカー、マーガレット・アーチャー、トニー・ローソン、バース・ダナーマーク、アンドリュー・セイヤーなどが中心となって展開している批判的实在論（研究初期の超越論的实在論）が結びついた理由はここにある。とくにその創始者であるバスカーは、ヒュームをはじめとする経験論や実証主義を批判し、批判的自然主義を打ち立てることを目的として発表された『科学と实在論 超越論的实在論と経験主義批判』（1978年）や、そこで展開された科学論を社会や人間に適用した『自然主義の可能性』（1979年）、ヘーゲルの弁証法を批判的に継承し、批判的实在論を進化、発展させようとした『弁証法 自由の脈動』（1993年）など、次々と優れた研究成果を発表してきた。彼によって新たに開拓された領域は、当初の科学哲学の領域ばかりでなく、経済学、経営学、社会学、教育学など多くの分野に適用され、その影響力は確実に広がってきている。

その影響を受けた領域のひとつに社会的質研究がある。経験的实在論や超越論的観念論に対する疑問とともに、そこから離れた社会構造や人間主体の理解が求められるようになっていたことからすれば、社会的質研究が批判的实在論を基礎にこの問題に深く分け入ろうとしていたことは、社会科学や人文科学の発展に新風を吹き込むものであった。本稿の目的は、社会的質研究が批判的实在論から何を学び、何を研究に活かそうとしていたのか、そしてその結果、どのような理論構成をとろうとしているのかを明らかにすることにある。社会的質理論が機械論的功利主義、構築的主意主義、弁証法的唯物論、構造的機能主義という4つの概念的枠組の批判を前提に発展してきたことを考えるならば（Lin and Herrmann 2015）、二つの思潮の接続点を明らかにしようとする関心は、社会的質理論が既存の社会理論とどのような位置関係にあるのかを明らかにすることともつながっている。具体的には、諸個人の自己実現過程と集団的アイデンティティの編成過程との弁証法的相互依存性という社会的質理論がこれまで明らかにしてきた中核概念と、その結果として登場する「社会的なるもの」（the social）という概念に批判的实在論がどのような理論的根拠を与えているかを明らかにすることにある（Walker and Maesen 2001）。そのことは、逆言すれば、社会的質研究の中核概念が批判的实在論の理論構造から見て、ことがらの本質に迫る適切な問いとなっているかどうかを検証することでもある。何故なら、このような問題設定には、「社会的なるもの」の存在とそれが生み出されるメカニズムを明らかにするという、観察することのできないものを推論する「仮説的飛躍」があるからである。仮説は検証されて初めて理論に昇華される。そのためには、我々が生きている世界を、経験の領域や現実の領域ではなく、实在の領域の問題としてとらえることが必要となる。したがって社会的質理論の中核に位置する概念の意義を明らかにするには、批判的实在論が言う实在の領域に関わる問題として、方法論的实在

論とその認識論への適用という観点から明らかにされるものでなければならない。

Ⅱ 批判的实在論の基礎概念

社会科学の関心のひとつに、「私たちが生きている世界（社会）を本質的に動かしているメカニズムはどのようなものか」という古くから追究されてきた問題がある。本稿の問題関心との関係で大事なことは、この問いを、「社会ならびに人びと、すなわち社会構造とエイジェンシーが、社会的实在として知識対象となるには、どのような性質を持っていなければならないか」というように、存在論的な問いに置き換えることである。このような問いのあり方を転換する意識がなければ、存在論が認識論に置き換わってしまう、いわゆる認識論的誤謬（epistemic fallacy）に陥るばかりか、観念論を存在論で構成できるかのように錯覚してしまう存在論的誤謬（ontic fallacy）の罠にはまってしまうことにもなる（バスカー 2006）。両者の誤りに気づき（すなわち経験の領域や現実の領域にとどまることなく）、实在の領域に関わる問題として接近していくには、社会的質研究が言う構成的相互依存性の分析が实在の領域に相応しい問題設定になっているかどうかをあらかじめ確かめておく必要がある。そこで、この必要性から、本稿の関心と関係する限りで、批判的实在論のいくつかの基礎概念について整理しておくことにしたい。

1 差異化された实在的世界—経験、現実、实在の領域

批判的实在論は世界が差異化されていることを指摘する。批判的实在論が既存の社会理論と大きく異なるのは、实在的世界を差異化された三つの領域に区分し、科学的研究に及ぼすそれぞれの可能性を明らかにしていることである。この区分は、存在論的区分というより、科学的研究を進めるための必要な手続き区分と考えた方がよいかもしれない。それをマトリックスで示したのが第 1 表である。

实在的世界を三つの世界に区分するのは、実験室という閉鎖空間を人為的に作り出すことで自然現象の法則性を発見することを可能にしている自然科学と違って、そのような人為的

第 1 表 实在的世界の三領域

	实在の領域	現実の領域	経験の領域
メカニズム	○		
事象	○	○	
経験的事実	○	○	○

（出所）ロイ・バスカー『科学と实在論 超越論的实在論と経験主義批判』（式部信訳）、法政大学出版局、3 頁。

介入を行うことのできない社会科学が社会現象の深層に迫るには、経験した領域はもちろん、経験の有無に限らず世界で起こっている事象を映し出す現実の領域ばかりでなく、その事象を生み出しているメカニズムの解明を行う別の領域が求められていたからである。表にあるように、経験的事実、事象、メカニズム全ての解明につながる可能性を持っているのは实在の領域だけである。冒頭の問いに求められているのは、この問いを实在の領域で取り上げ、社会を動かしているメカニズムに迫ることである。

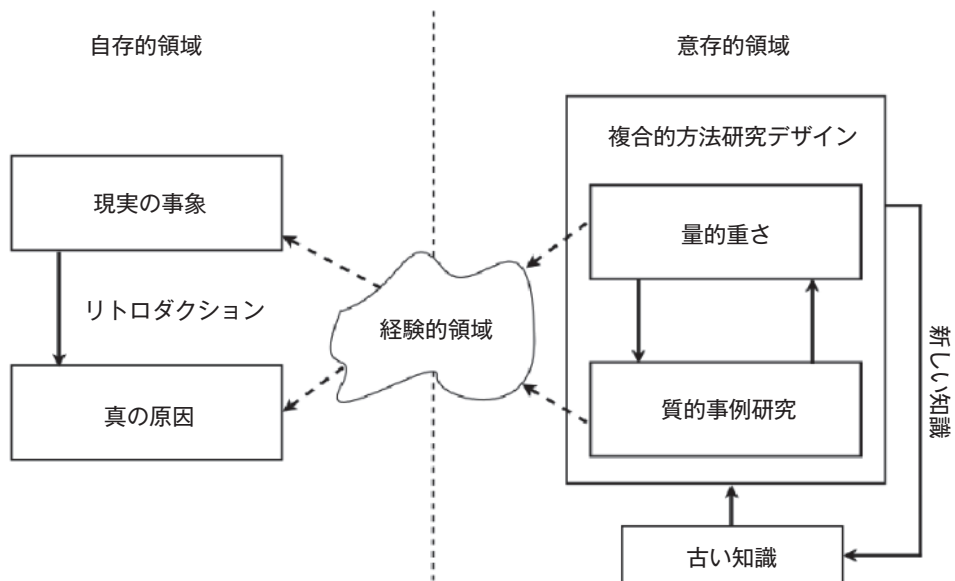
实在の領域において事象の生成メカニズムを因果的に説明しようとする場合、いくつかの概念による媒介が必要となる。弁証法的構成的相互依存性という概念が社会を動かしているメカニズムの解明という課題に接近する上で妥当な概念であるかどうかは、批判的实在論の研究手法との関連で見てみなければならない。社会的経験や社会現象など日常的に何気なく使われている言葉が示すように、私たちには、社会を経験している（することができる）という根拠のない錯覚がある。しかし、社会は、直接観察することが難しく、どこにあるのかその所在さえはっきりしない存在である。不確定な存在に接近するには、客観的实在としての社会を理解するメタ理論や発見的方法が求められる。勿論、（メタ）理論を通じて対象に接近しようとする以上、事実は理論に依存することになる。しかし、その理論は認識論的に相対的なものでしかありえず、常に可謬の危険性をはらんでいる。何故なら、社会を構成している複数の要因が重層的に絡み合い、それぞれ異なる方向に向かう中で、主たる要因の特定や予測さえ難しくなっているために、その認識は常に相対的次元にとどまらざるをえないからである。注意すべきは、理論負荷的であるからといって、理論に決定権があるわけではないことである。だからこそ、实在の領域で発見された「社会的事実」が対象のメカニズムをきちんと映し出しているかを合理的に説明し、検証することが求められる。社会的質研究と批判的实在論の理論的接続点を明らかにするという本稿の関心も、その接続点が实在の領域に属していることを確認し、そこにどのようなメカニズムが働いているのかを確定した上で、再帰的に検証することが必要とされている。

2 自存的存在と意存的存在

批判的实在論は、存在するものを、人びとがどのように意識しているかに関わらず实在すると考える自存的（intransitive）存在と、人びとの認識に依拠する意存的（transitive）存在に区分する。批判的实在論からすれば、社会構造もエイジェンシーもそれぞれ自存する存在であるが、それぞれのメカニズムを明らかにするには、これらに接近する研究方法と三つの領域との関係をはっきりさせておく必要がある。第1図は、ザッカリアディスらの研究にしたがってそれを図示したものである。

この図は、批判的实在論の中でも、最もラディカルな内容を含んでいる。ヒューム的な経験論や実証主義、そしてそれを一部受け継いだカント的な認識論に立つならば、経験の領域

第 1 図 知識引用のための批判的实在論におけるリトロダクティブアプローチ



(出所) M. Zachriadis et. al., Methodological implications of critical realism for mixed-methods research, *MIS Quarterly*, 37 (3), Figure 2, 2013.

と实在の領域をつなぐ媒介項の位置にあるのが現実の領域ということになる（もっとも、経験論や実証主義に实在の領域はないが）。因果的力やメカニズムの解明を課題とする实在の領域につなげる役割を果たすのが、経験の領域で知覚や観察を通じてつかまえた対象を事象や出来事として実際に発生するレベルで把握する現実の領域だからである（飯沼 2019）。

批判的实在論の通常理解にしたがうならば、経験の領域は意存的世界に位置し、意存的世界と自存的世界の境界線上にある現実の領域が实在の世界に媒介していると考えられている（曾他 2020, 48 頁）。しかし、この図では、意存的領域と自存的領域をつなぐ媒介の役割を果たしているのは経験の領域（経験の領域は意存と自存の境界に位置している）である。この理解にしたがうならば、過去の知識に新しい知識を付加することで追究される研究（方法）が意存的領域に属しているのに対して、現実の領域と实在の領域（現実の領域は实在の領域の下位概念である）は自存的領域に属している。このことから、この図が批判的实在論の中でも独自の研究方法を展開していることがわかる。この図が实在に迫るラディカルな内容を含んでいるのは、批判的实在論の通常理解と違って、現実の領域を意存的世界と自存的世界の境界に位置づけるのではなく、自存的世界に内在する位置に移動させ、实在の世界とのつながりを更に積極的につかまえようとしているからである。そうしなければ、アブダクションやリトロダクションという新しい推論形式を導き出すことができず、演繹や帰納という古い研究方法を引き継ぐことだけに終始してしまい、实在の世界を映し出せなくなるからである。

この図では、経験の領域を意存的世界と自存的世界をつなぐ境界に位置づけている。実在を動かしているメカニズムの解明が求められているといっても、その領域だけで完結できるわけではなく、経験の領域や現実の領域の知見を踏まえ、それを活かすことでメカニズムの解明に近づくことになる。ここで大事なことは、意存的領域で行われる研究方法が古くからある演繹や帰納という推論形式にとどまっているのに対して、自存的領域でのメカニズムの解明という課題からするとこの二つの推論形式だけでは不十分であり、新たな推論形式が求められていることである。意存的領域で行われる研究やその方法はヒューム以来の経験主義と実証主義に基づいており、そのため、そこで明らかになったことがらもまた経験の領域に限られたものでしかない。フーは、「独立した実在と主観的解釈を二重に承認することが、批判的実在論を、伝統的な実証主義的（経験主義的）のパラダイムと社会的構築主義的（解釈主義的）パラダイムから区別しているものである」（HU 2018, p.2）と述べている。後に述べるアブダクションとリトロダクションはこの不十分さを乗り越えようとする推論形式である。ただし、この図では、現実の領域から実在の領域へつないでいる推論形式がリトロダクションであるという説明が行われている。しかし、本来、リトロダクションはアブダクションと一体と考えられる推論形式であり、リトロダクションがアブダクションを前提として成立していることからすれば、リトロダクションと記述されている箇所にはアブダクションも含んでいると考えるべきである。それでは、アブダクションとリトロダクションが現実の領域から実在の領域の移行過程で登場してくる理由は何なのだろうか。

現実の領域と実在の領域の違いには、メカニズムと傾向性の違いが反映している。例えば、マッチを擦れば火がつくというできごとは、マッチにそのような結果（火がつく）につながる生成メカニズムを構造的にもっているということ、すなわち、マッチを擦るという原因が与えられれば、そのメカニズムが発動するという因果的力をもっているということである。しかし、マッチを擦ったからといって火がつかない場合がある。マッチが湿っていたり、空気中に酸素がなければ、着火行為は空回りしてしまう。火がつくという結果は他のメカニズムとの複合作用の結果であり、着火を妨げるメカニズムが強く働くとき、火はつかないこともある傾向性を表わすものでしかない。ダナーマークは、「いくつかのメカニズムは互いに強化し合う一方で、他のメカニズムは互いの現れを妨害するといったように、様々な活動の結果は、異なるメカニズムの作用の複雑な組み合わせである」と述べている。このことは同時に、「因果法則が普遍的な経験的規則性としてではなく、傾向として分析されなければならないことを意味している」（ダナーマーク 2015, 304 頁）。バスカーも次のように述べている。

「傾向とは、大まかに言うと、必ずしも実現されるとは限らない力のことであり、その意味で、開いた系にも十分対応しうるよう調整された概念である。閉じた系の場合、傾向はい

ったん働き始めれば必ず実現される。開いた系の場合、「相殺作用」や「反作用因」が働くため、その傾向は実現されるとは限らない。しかし、傾向が動き出した以上、それが発展しないのにはそれなりの理由があるはずである」(バスカー 119 頁)。

ここには、ひとつの階層の出来事の規則性やメカニズムを発見するために人為的に作り出された実験室という閉鎖空間と違い、多くの階層とそれぞれのメカニズムに開放された実在の世界との違いが映し出されている。特定の階層を取り出すことは閉鎖系では可能であるとしても、それが不可能な開放系では、メカニズムは傾向としてしか現われず、それが発動したとしても、発現するとはかぎらないからである。問題は、たんなる演繹や帰納では説明できない傾向性をどのように解釈するかである。大胆な言い方をすれば、マッチを擦れば火がつくことも、マッチを擦っても火がつかないことも現実でありえる傾向性の中で、マッチを擦れば火がつくというメカニズムを仮説的に発見し、それを週及的に説明・検証するのが演繹や帰納を補完するアブダクションであり、リトロダクションである。

現実の領域でアブダクションに求められているのは、こうした傾向性を発見し、メカニズムの解明を使命としている実在の領域につなげることである。実在の領域で求められているのは、メカニズムの発動とそれを妨げる複数の要因が働いている中で、主たるメカニズムを特定し、検証することにある。

3 実在の階層化—メカニズムの階層と創発特性

ダナーマークは、「世界は単に差異化され構造化されているだけでなく、階層化されているのである。メカニズムは順次実在の異なった層や階層に属するのであり、したがってそれらの階層は位階的に組織されている」と述べている(94 頁)。ここには、実在的世界の差異化に加えて、階層性というもうひとつの実在の本質的特徴が述べられている。

社会的実在はすべて異質な要素や次元が複雑に絡み合うことで成り立っている。台風を一例に挙げると、そこには、海水温度、積乱雲の発生、偏西風など風の影響、気圧などの台風を発生させる直接的なメカニズムの他に、温暖化の進行など気候変動の問題やそれに対する国際的な取り組みの遅れといった社会的なことがらも広い意味で関係している。これらひとつひとつの要因が台風発生に関係しているのだとすれば、それぞれ異なる要因が構造化されて絡み合っていると言うことができる。台風の発生原因をひとつに絞ることは難しい。またそれを行うこと自体に意味はない。しかし、この指摘だけでは、台風発生に多様なメカニズムが働いているということにとどまっており、批判的実在論の本質的特徴が浮き彫りにされているわけではない。批判的実在論の最大の貢献は、台風を発生させる要素と台風それ自体の次元の違い、そしてその創発的特性を浮き彫りにしたことにある。バスカーはこの点について次のように述べている。

「ある事象が引き起こされた場合、その事象を生み出したのは特定の環境条件の下で働く何らかの（作因たる）事物である、と言えるのは、事物が決して原子的成分に還元されえないものだからである」（バスカー 2009, 134 頁）

ここで述べられているのは事物の創発的特性である。この世に存在するもののほとんどは、物理的メカニズム、化学的メカニズム、生物学的メカニズム、そして社会的メカニズムが順次積み重なる形で構造化されている。そして、それぞれの階層のメカニズムが上位の階層に対して創発的特性を発揮し、新しい構造を作り出している。階層化されているのは实在の領域に属するメカニズムであり、現象や事象という現実の領域に属するものではない（97 頁）。最も低位にあるメカニズムは、ある出来事を規定している基礎的メカニズムにあたる。しかし、そうだからといって、出来事は多くのメカニズムによって複合的に構成されており、それぞれが影響し合っていることから、どのメカニズムが最も重要なのかは状況次第となる。基礎的メカニズムだからといって、それが出来事を生み出す主たる要因になるというものでもない。

それぞれの階層はそれぞれの創発的特性を持っている。創発的特性とは、「他の諸対象から構成されている〔ある〕対象が、そのように構成されている結果として、そこに、新しい構造、力、メカニズムを発生させること」である（ダナーマーク 2015, 308 頁用語集）。すなわち、創発的特性とは、社会的实在を構成している要素の特性とは異なる構造、力、メカニズムを新たに備え、他の实在に影響を及ぼすことになる特性を生み出すことである。例えば、水は可燃的特性を持つ水素と酸素からなるが、燃えているものを消すという、水素や酸素と全く逆の特性を持っている。この場合、水は、水素や酸素という構成要素に還元することができない「創発的力」を持っていることになる。この例が批判的实在論にとって大事なのは、水が水素や酸素とは異なる一段と高い次元に階層化されていること、そのことによって新しい因果的力を持つようになってきていることである。社会的实在の階層性と創発的力是一体のものである。創発的特性はこのように实在の階層性から派生する。

本稿の問題関心との関係で大事なことは、位階的に組織された实在世界の中で、社会が最も高い次元に位置していることである。社会の創発的特性を探ることは社会を動かしているメカニズムを探ることにつながっている。

Ⅲ 批判的实在論の推論形式：アブダクションとリトロダクション

社会的質研究が理論的基礎に置いている批判的实在論は、経験的实在論や超越的観念論を批判的に乗り越えようとする格闘の中から発展してきた理論である。それでは、それは何をめぐる格闘だったのだろうか。以下は、この点について書かれた、バスカーの『科学と实在

論』序論の一節である。

「本書の提唱する科学哲学の基本的立場は、一言で言うと、超越論的实在論（注：後の批判的实在論）である。実験によりある特定の現象が観察されると、その現象の生成メカニズムを的確に捉えるための理論モデルがつくられる。それを通じて科学は第1段階から第2段階へと弁証法的に展開していく。科学の発展過程をこのように見る点では、超越論的实在論と新カント派は考えを共有している。しかし、超越論的实在論の場合、新カント派とは異なり、さらに一步進めて、理論メカニズムの实在性が経験的にテストされ、科学的手続きは第2段階からその次の第3段階へと進展していかねばならない、と考える。また、超越論的实在論と経験論的实在論の大きな違いは、後者が実験室で観察された事象を一つの規則性とするのに対して、前者はそれを（実験的環境であるが故に生まれた）実験結果の安定性とする点にある。一方、超越論的实在論は、第2段階で仮説的に提示された理論的メカニズムを単に想像上のものと捉えるのではなく、それを实在のものとして捉え（さらにその認識可能性を認める）点において、超越論的観念論とは大きく異なる。超越論的实在論の立場からすると、そのような見方をとらない限り、科学の発展とか変化といった出来事には何の合理性もない」（バスカー 2009, 5～6 頁）。

ここでバスカーが述べているのは、事象に対する認識を意存的次元（認識論の次元）から自存的次元（存在論の次元）にまで引き上げること、それがたとえ実験室という人為的に作り出された閉鎖的環境の中で観察された規則的な事象であるとしても、それを理論的モデルに昇華した第1段階から第2段階への発展ばかりでなく、それがたんなる閉鎖空間の中で生み出された安定状態にすぎないかもしれないという不安を払拭するためにも、理論メカニズムが实在するかどうかをテストする第3段階へ進めなければならないということにある。ここで注意しておかなければならないのは、このような弁証法的発展には、その裏側に、存在論から認識論へという逆の方向を辿る基礎的過程が隠されていることである。バスカーが弁証法を第2段階にとどめることなく更に第3段階へと引き上げることを求めているのは、事象や存在物は人間による認識の前にそもそも实在するものとして「すでにそこにある」からである。したがって認識論から存在論へという発展経路はその裏側にある存在論から認識論へという基礎的過程を表出し、認識の筋道を辿ることができるよう顕在化しようとしたものでしかない。新カント学派のように認識論のレベルで思考回路をとどめてしまうならば、理論モデルが实在を正確に映し出しているかどうかを確かめる契機が失われ、認識論的誤謬の罠に陥ってしまうことになる。認識論的誤謬とは、バスカーの言葉を借りるならば、「存在物に関する言明は例外なく存在物に対する人間の認識に関する言明に翻訳される、とする見方のことである」。経験論や実証主義を批判する批判的实在論からすれば、实在するもののメ

カニズムの解明が科学の目指すところであり、認識論は存在論に包含されていなければならないことになる。事象のつかまえ方は、カントに代表される超越論的観念論の方向に進むか、バスターのように超越論的実在論の方向に進むかというように、分岐することになる。

この引用から学ぶべきもうひとつの論点は、実験室の捉え方、すなわち自然科学と社会科学の認識環境の違いである。自然科学と違って実験室での実験を直接行うことができない社会科学では、社会がどのようなメカニズムで動いているのかを説明するために、自然科学とは異なる方法論を必要とする。自然科学のように、実験室という閉鎖空間の中である事象の規則性や法則性を発見できたとしても、それは実験者が人為的に介入した条件の下で得られた規則性や法則性であるかかみせず、そのような限定された状況を社会科学や社会にただちに適用することはできないからである。社会は実験室のような閉じた空間ではありえず、社会の生成・発展メカニズムを認識するには、社会が開放系であることを前提に、自然科学とは異なる方法論を必要としている。

科学はこれまで、事象の本質に迫る方法論として、演繹と帰納という二つの推論形式を一般的に採用してきた。批判的実在論の立場からすれば、この二つの推論形式では、認識論のレベルで有効ではあっても、弁証法を第2段階から第3段階へ引き上げ、事象の構造メカニズムを解明するまでにはいたらない。批判的実在論はこれら二つの推論形式に、アブダクションとリトロダクションという更に別の推論形式と説明様式を加え、実在の領域に迫ろうとしていた。分析的推論形式に属する演繹に対して、帰納もアブダクションも拡張的推論形式に属する。しかし、帰納が観察可能な事象から一般化の可能性（蓋然性）を推論するだけなのに対して、アブダクションは「超越の対象」という観察不可能な事象のメカニズムの解明を目指す「仮説的飛躍」を特徴としている。アブダクションとリトロダクションという二つの推論形式があらたに必要になるのは、実在の領域における因果的力やメカニズムを我々が直接観察することができないからである。観察できないものを描出するには、論理必然性や蓋然性とは別の想像力（創造力）に基づいた推論形式を必要とする。この二つの推論形式は、社会的質研究の中核概念の導出とどのようにつながっているのだろうか。

1 アブダクション

最初に、アブダクションを哲学的に創出したといわれる、プラグマチストとして著名なパーズにしたがって、演繹や帰納、アブダクションとの違いを確認してみよう。批判的実在論の特徴的な推論形式であるといわれるリトロダクションは、アブダクションの基礎の上に、それを延長することで採用されている（米盛 2007）。第2表は、パーズが示す三つの推論形式の違いをわかりやく例示したものである。

この表から見てもわかるように、規則、事例、帰結それぞれの記述内容は、三つの推論形式で変わるところはない。異なるのは説明順序である。演繹法は、規則と事例から導き出さ

第 2 表 演繹，帰納，アブダクション—推論の形式的構造

演繹	帰納	アブダクション
規則：この袋から出されたすべての豆は白い	事例：これらの豆はこの袋から出された	規則：この袋から出されたすべての豆は白い
事例：これらの豆はこの袋から出された	帰結：これらの豆は白い	帰結：これらの豆は白い
帰結：これらの豆は白い	規則：この袋から出されたすべての豆は白い	事例：これらの豆はこの袋から出された

(出所) パース・ダナーマーク他『社会を説明する』(佐藤春吉監訳)，ナカニシヤ出版，136 頁から転載。

れる必然的帰結である。袋から出された豆がすべて白く、豆がこの袋から出されたことを確認できるのであれば、これらの豆が白いのは論理必然である。規則の前提の中に、帰結の内容がすでに含まれていると言ってよい。帰納法では、事例と帰結から蓋然的帰結が導き出されている。豆が袋から取り出され、その豆が白かったとしても、袋にあるすべての豆の色が調べられていなければ、袋から取り出したすべての豆が白いというわけにはいかない。結論は可能性の域にとどまっているものでしかない。蓋然性を担保するのは統計的有意である。それに対してアブダクションの例では、豆が白いからといって、これらの豆がこの袋からだけ出されたという確定的結論を導き出すことはできない。別の袋から出された白い豆という可能性を排除できないからである。アブダクションが推論形式として重要なのは、規則と帰結、事例の間の論理的一貫性や蓋然性にあるのではない。むしろ大事なのは、規則と帰結から導かれる事例が、あるひとつの解釈、すなわちいくつかある解釈のうちの一部を信憑性のあるものとして仮説的に提示することにある。アブダクションの意義はこのように、その解釈が誤っているかもしれないという可能性を含め、「私たちが何かを説明するもしくは解釈することの帰結として、その結論が新たな知見を提供する」(ダナーマーク，137 頁)という仮説的推論にある。

拡張的推論方式としてのアブダクションを有効な解釈の方法として意義づけることは、アブダクションを、事象を再記述する、或いは再文脈化する方法として意義づけることにつながる。ダナーマークは、個別の出来事／現象と一般的構造を横並びにし、前者から後者を導き出すことの是非を問題にしている。個別の出来事／現象と一般的構造の違いは、観察可能であるかどうかにある。両者を比較するのは、観察可能な出来事／現象から観察することができない一般的構造を導き出すことができるかどうかを確かめるためである。一例を挙げるならば、「職場，家，もしくは政治的会合においてコミュニケーションをとる男性と女性」という個別の出来事／現象から「ジェンダー構造，ジェンダー理論の観点で記述され

る内的構造」という結論を導き出す飛躍に説得力があるかどうか、という両者の関連である。両者のつながりに説得力があるとすれば、そこには何があるのだろうか。大事なことは、ここで問題にされていることが両者の間の論理的つながりや蓋然性ではないことである。むしろ問題とされているのは、一般的構造が個別の出来事／現象の記述もしくは文脈化に成功しているかどうか、少なくとも説明の成功につながるひとつの解釈を提示しているかどうかにある。犯罪を解決するときに刑事はこれまで培ってきた犯罪現場での経験知からいくつかの仮説を描き、それに照らし合わせて柔軟に解釈することで、犯罪が起こった原因や背景を探ろうとする。医者は患者が訴えている症状から、これまでの症例や医学知識に基づいて様々な可能性を想定し、最も適格と思われる診断を行う。エンジンが軋む振動音から車の故障箇所を見つけようとする整備工も同様である。これらに共通しているのは、それぞれの判断に間違いがあるかもしれないという可謬性を秘めつつ、既存の経験知、理論、技術水準に従いながら最適と思われる判断をしようとしていることである。間違いの可能性がある以上、そのことを理由に批判することは勿論可能である。アブダクションの意義は、可謬性を認める一方で、新しい包括的なアイデアや解釈を提示しようとする推論的飛躍にある。

アブダクションの可能性や意義は、既存の経験知、理論、技術水準などからははみ出してしまう状況に対応しつつ、それを動かしているメカニズムは何かという問いに的確な判断を行うことである。記述や文脈化が再記述や再文脈に発展するのはこれまで経験したことのない現象や事態に直面した時に的確に対応する想像力（創造力）である。ダナーマークはこの点について次のように述べている、

「アブダクションは、科学と実在の関係を考察するある方法と結びついており、そこには、何が究極的な真であるかを決定するための、真の理論や規則が存在しないということが含意されているのである。とはいえ他方では、そこにはより良い知識を増進させていく可能性が存在しているのであり、このことは二つの意味で言える。第1に、再記述は、研究の対象となっている個別の事例についてより深い知識を提供することができる。第2に、理論をさらに新しい諸事例と関連付けることによって、一般的文脈や構造に関する理論を、徐々に検証し、修正し、基礎づけることができるものである」（ダナーマーク 2015, 143 頁）。

しかし、これだけでは、再記述もしくは文脈化のレベルにとどまっている。アブダクションは、論理上の飛躍を含んでいる可能性を秘めているだけに、そこに信憑性があるかどうかを確かめるもうひとつの推論形式を必要とする。帰結から遡ってそれを生み出している前提の是非を問うことである。それがリトロダクションである。仮說的推論とその検証という点からすると、アブダクションとリトロダクションは一体のものである。両者の間には、繰り返し行われる、行きつ戻りつの相互関係がある。

2 リトロダクション

リトロダクションは、アブダクションによって再記述、再文脈化されたことがらについて、あらためて「Xが存在すること、そしてXがそもそもXであるためには、どのような諸性質が存在していなければならないか」、すなわち、「何がXを可能にしているのか」という遡及的問いを立て、その答を、推論を通じて発見する過程と、発見されたことがらを説明するもうひとつの過程の二つから構成されている。この点についてマーガレット・アーチャーは、「なにが存在すると想定するかということは、それがどのように説明されるべきか」、「言い換えれば、社会的実在がなにによって成り立っているとみなされるかということは、その存在についての説明がどのようにアプローチされるのか」というように、社会的存在論と説明との間に一貫性がなければならないことを主張している。リトロダクションの意義は、アブダクションの成果を活かし、仮説的に推論されたことがらを、実在の領域であらためて検証（再発見）することにある。

ダナーマークは、Xを可能にしている必然的な諸性質を発見するために、リトロダクションには、その推論形式に相応しい戦略が必要であることを指摘している。その戦略とは、反事実的思考、社会実験、病理事例研究、極端な事例の研究、比較事例研究の5つである。これら5つの戦略は、それぞれ独立しているものの、Xの諸性質の発見に向けて相互補完的な関係にある。それぞれについて見ておこう（ダナーマーク2015、第4章）。

(1) 発見

①反事実的思考

反事実的思考とは、「～がなければ、Xはどのようにになると想定することができるか」という問いを立てること、すなわち存在に対して非存在を、必然に対して偶然を、構成的なものに対して非構成的なものについて考察することで、アブダクションを通じた再記と再文脈化された事象の意義を明らかにすることである。

②社会実験

批判的実在論が求める社会実験は、自然科学が行っている人為的に作り出した環境の中で事象の法則性を発見しようとする実験室での試みとは違い、人為的介入が何ひとつない、ありのままの自然環境の中で行われる。大事なことは、事象を開放された環境に置き、それを成立させている構造の前提条件をそのままの姿で取り出し、分析の俎上に載せることである。リトロダクションは、そうした自然環境の中で、実在の領域の中に前提条件や因果的力、構造的条件を発見しようとする。ダナーマークが参考になっているのは、エスノメソドロロジーによる日常的な諸活動の中に内属する構造分析である。エスノメソドロロジーが重要なのは、会話という日常的な社会的相互行為の中に、「何が社会秩序や社会的安定性を持続的なものになっているのか」という問いに、社会的実験と言ってもよい試みが行われているからである。

社会的質研究の理論的基礎：批判的实在論（1）

「科学の仕事は、新しい社会的できごとや活動を発見することではなくて、それらのよく知られた社会的状況を可能にする前提条件を再構成することである」（同、157 頁）。それを可能にするのが社会的実験である。

③病理事例研究（及び、極端な事例研究）

社会実験ばかりでなく、すでにある事例から学ぶことも戦略のひとつである。その中でも、諸条件の創発性が妨害されメカニズムの動きが見られない事例と、メカニズムがそのままの動きをする極端な病理事例について研究を行うことである。ダナーマークは、「事例の両方のタイプに共通することは、それらを通じて、逸脱的なものを研究することによって、通常の諸条件について学ぶことができるということである」と述べている。

④比較事例研究

比較研究もまた、リトロダクションの戦略として有効である。事例が異なれば当然、前提となる諸条件も異なる。したがって比較事例研究は、ことなる前提条件を比較することになる。この戦略が有効なのは、異なる前提条件の中から偶然的要素を除去し、必然的と思われる条件を引き出す方法に生産的意味があるからである。

（2）説明

説明には、演繹と帰納に基づいた経験主義的、実証主義的方法、具体的にはカバー法則と呼ばれるポパー—ヘンペルの説明方法と、アブダクションとリトロダクションに基づいた批判的实在論による説明方法とがある。ダナーマークにしたがって、両者の違いを見てみよう。ポパー—ヘンペルの説明方法は次のような記述方法をとっている。

説明項：投下されたすべての物体は、地上に落下する（普遍的法則）。

サラはボトルをもっており、もし彼女がそれを投下したなら、そのボトルが地上に落下するのを止めるような物体は存在しない（枠組条件）。

サラはがボトルを投下する。

被説明項：ボトルは地上に落下する。

この例は、論理必然的な演繹の説明となっている。普遍的法則が統計的に高い蓋然性を持つにすぎないことを前提とした帰納的説明でも、普遍的法則が統計的確立に替わっているだけで記述方法に大きな変更はない。批判的实在論が問題とするのは、この例から、ボトルが地上に落下したという経験的事実は説明されてはいても、「物体を地上へと落下させているものは何なのか（そのメカニズム）について私たちは何も聞かされていない」（同、165 頁）ことについてである。それは、すでに普遍的法則や、統計的に高い確率（蓋然性）によって説明済みと反論されるかもしれない。しかし、この反論は私たちのこれまでの経験に基づい

て実証されているものでしかなく、あくまでも経験的实在論の中の話でしかない。そこにあるのはヒューム以来の伝統的な経験主義と実証主義である。明らかにされるべきは、ボトル落下を生み出すメカニズムとその構造的な前提条件である。批判的实在論がアブダクションとリトロダクションの二つの推論形式を採用するのは、この欠陥を埋める必要性からである。

批判的实在論に適した説明方法は、ダナーマークによれば、①記述⇒②分析的分解⇒③アブダクションによる再記述⇒④リトロダクション⇒⑤異なる理論と抽象との間の比較⇒⑥具体化と文脈化の段階をたどる。

リトロダクションは、①から③の過程で引き出された事象の構成要素を分解し、それぞれの要素について解釈し、新たな文脈の下で再記述する。解釈や再記述は、分解した要素の組み合わせについて想像的（創造的）飛躍を行うことであるから、「これも考えられる」、「あれも考えられる」というように、多様な方向をたどる。④のリトロダクションとは、あれこれ考えられるシナリオの中から、あらためて「XをXたらしめている本質的要素は何か」を問い、その性質や生成メカニズムを明らかにしようとするものである。⑤は、リトロダクションまでの過程で明らかにされたことがらを理論に昇華し（抽象化し）、更に、⑥で具体的文脈の中に埋め込んだ場合どのようにそのメカニズムが発現するかを検証することである。ほとんどの事象は複数の異なるメカニズムで動いているから、あるメカニズムがそのままの形で機能するとはかぎらない。他のメカニズムの動きが邪魔をすることもあるからである。

Ⅳ 社会構造とエイジェンシーの特性

社会的質研究が「社会（的）」に関わる領域を問題にするということは、社会理論がこれまで取り上げてきた社会と個人、或いは社会構造や社会形態と個人主体や行為主体性（エイジェンシー）との関係をそれまでとは異なる視座から俎上に載せるということを意味している。「社会とは何か」、「社会はどのように構成されているのか」という問いは、古代ギリシャ哲学以来社会理論が取り上げてきた古典的な問題のひとつである。しかし、批判的实在論の目から見れば、この問いに説得力のある回答がこれまで提示されてきたわけではなかった。その理由のひとつは、アーチャーが指摘するように、存在（実在）論、方法（認識）論、実践的社会理論という三つの要素すべてがうまくかみ合う形で確定した説明が行われてこなかったからである。研究対象を知覚・観察できるものに限定する経験主義にしたがうならば、直接経験することのできない社会は実在しているのかどうかさえ疑わしい。それだけに、深層にある社会の構造やメカニズムを掘り下げることのできる斬新な方法論が求められている。逆に言えば、この方法を発見することができなければ、認識論や解釈方法にそのまま反映することになり、不十分な理論構成しか行われなくなってしまう。存在論とは、簡単に言えば、その存在物の特徴的な本質を特定することである。方法論とは、存在論で特定された本質を

合理的に説明することである。存在論とその説明には認識論上の一貫性がなければならない。実践的社会論とは、存在論とその説明に基づいて体系的な理論を構成することである。社会的質研究が批判的实在論をその理論的基礎に据えているのは、社会の質を探究する上で、批判的实在論の方法論を採用することが有効だと考えているからである。

ここで重要なのは、社会的实在が低い次元から高い次元へ階層的に構成され、それぞれが創発的特性を持っているという批判的实在論の議論から見て、社会構造—エイジェンシー関係はどのように取り上げられるべきなのか、その視角である。結論を先取りしていえば、批判的实在論は、社会的構造を最も高い階層に、その下に人間（エイジェンシー）の階層を位置づける（さらに言えば、生理的階層、化学的階層、物理的階層……へ遡及していく）階層性を持っている。したがって、社会構造—エイジェンシー関係は、両者が同一平面にあるフラットな関係ではなく、高い階層にある社会構造とその下層にあるエイジェンシーという上下の関係ということになる。勿論それは、従属関係にあるということではない。批判的实在論が明らかにすべきなのは、階層的に編成されたこの関係の持つ意味である。高い次元にある实在は下位の实在に還元されないこと、それぞれの階層の实在はそれぞれに創発的特性を持っているという批判的实在論の命題は、社会は個人主体から、個人主体は身体と精神の生理的動きから創発することを意味している。この命題は、私たちが営む生活世界にどのような意味を与えるのだろうか。社会的質研究と批判的实在論の接点を明らかにすることは、「私たちはどのような世界に生きているのか」という問いを追究することにほかならない。

1 自律した社会構造とエイジェンシー

存在（实在）論、方法（認識）論、実践的社会理論のうち最も大事なものは、研究起点となる存在（实在）論である。社会構造—エイジェンシーの関係において、社会は实在するということから出発することができるのかどうか、实在するとすればそれはエイジェンシーとどのような関係にあるのか、そしてその場合、エイジェンシーはどのような役割を果たすのかという問題群は、それを説明するときの仕方や理論構成のあり方と密接につながっている。「どのような研究の分野でも、存在しているものがなにかというその存在の性格は、どのようにそれが研究されるべきか、ということと無関係ではありえない」からである。

ウェーバーに代表される主意主義的理解にしたがうならば、社会は個人の社会的行為の帰結として存在することになる。デュルケムに代表される方法論的集合主義の立場に立つならば、社会は個人の社会的行為に先立つ存在になる。また、バーガー＝ルックマンやギデンズのように、社会は個人に（方法論的個人主義）、個人は社会に（方法論的集合主義）に還元してしまう両者の欠点を克服しようとする第3の社会的存在論が新たに生まれることも当然となる。

批判的实在論の創始者バスターは、これらの問いに、『自然主義の可能性』の中で次のよ

うに述べている。

「人間は社会をつくり出すのではない。社会はいついかなるときも個々の人間に先立って存在し、人間活動の前提条件となっているからである。むしろ社会はさまざまな構造や慣習や約束事から成る一つのアンサンブルとして存在しており、そのような存在を人々が再生産したり変形したりするのである。逆に、そのような働きかけのないところに社会が存立することはない。社会は人間の活動と離れては存在しない。反面、社会は人間の活動の産物ではない」(バスカー 2006, 41 頁)。

バスカーによれば、社会は自存する存在として人間の活動に先立つ社会的実在であること、その実在は人間が活動する前提条件であり、したがって人間ができるのは社会をつくり出すことではなく、それを再生産したり変形すること、もしくは維持することだけである。アーチャーは、バスカーのこの指摘を受けて、社会構造の再生産や変形を形態生成、維持を形態安定と呼び、二つの方向に分岐していくことを指摘している。自存とは、ある実在が他の存在に還元しなくてもそれ自体として自律するということである。社会は自存するというバスカーの指摘は、社会が現在時制に属する人間の活動によって直接生みだされたものでなく、過去から継承し、「そこに、すでにある」ものとして自律しているという認識とつながっている。社会は文字通り社会的実在として自存している。

同時に、個人主体も実在している存在である。したがって、「社会とは何か」という問いを存在論的問いとして受け止めることと合わせて、「人間のどのような特性が人間をして知識の対象たらしめるのか」というように、人間主体についても存在論的な問いが立てられなければならない。人間主体は社会構造との関係に入る前に、それ自体自存する社会的実在である。人間は対象を知覚・観察することができる主体であるだけに、経験主義の立場からすれば、自存していることは当たり前のように見える。何故なら、現象学がとくにそうであるように、最後に信じられるのは、コギトとしての自分自身だからであり、それが存在していないと認識することなどそもそもありえないからである。

批判的実在論が求めているのは、社会構造とエージェント双方の因果的力を承認し、両者の実在的な連関＝相互作用を追究することである。

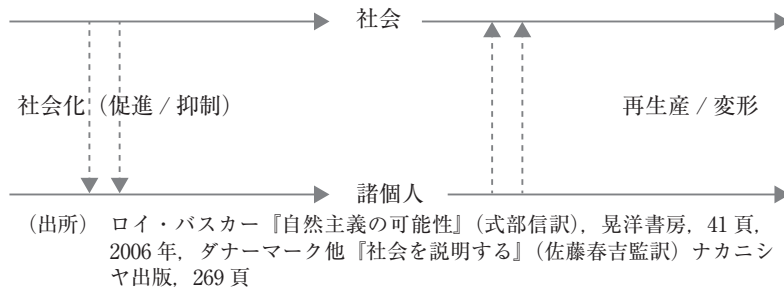
2 社会の先在性

それでは、何故、社会は先在すると言えるのだろうか。また、それと同時に、エイジェンシーやエイジェンツも社会的実在として措定されている理由は何なのだろうか。バスカーは、その理由を、アリストテレスが『自然学』や『形而上学』で明らかにした質料因、形相因、目的因、作用因という現象の四因説から説明している。バスカーによれば、人間活動の客体

化とは、「人間の意識活動として所与の対象に働きかけることであり、したがってそうした対象のないところでは決して起こりえない」ものである。ここで「所与の」という部分に傍点が付けられていることに注意しておきたい。人間活動による何らかの働きかけが成立するには、人間活動という作用因の他に、働きかけの対象という質料因がそもそも存在していなければならない。すなわち、人間活動が行われる前にそれに貢献する対象がすでに存在していることが前提となる。社会についても同様である。「あらゆる活動は何らかの社会形態が前もって存在していることを前提条件にして成立する」。一見すると当たり前のように見える客体化のこの意義は、社会理論ではとくにウェーバー理解社会学のように、諸個人の意図的な社会的行動によって社会が生み出されるというように主意主義的に理解され、そこではあたかも作用因によって質料因が生み出されるかのような逆転が生じている。このような主意主義的理解では、対象は客体化が行われるときの前提ではなく、帰結として理解されてしまう。また、デュルケムのように社会構造を物象化された存在として理解するならば、社会構造の先在性を指摘することができても、作用因にあたる人間主体の行動は社会構造の付随的現象として片付けられてしまうことになる。

このような理解を批判する中で、バスカーが社会構造とエイジェンシーの相互関係についてまとめたのが社会活動の転態モデルと呼ぶモデルである（第2図）。この図にある社会は、諸個人の活動の前にすでに先在しており、現在の人間の活動によって生み出されたものではない。社会の左側から右に矢印で伸びる実線が先在して現在に現れていることを表わしている。このことは諸個人の実線についても同様である。このモデルでは、社会と個人はそれぞれ分離した、独立した社会的実在として描かれている。社会システムはこのように、それぞれ自律した存在としての社会構造とエイジェンシーの関係の中で成立している。それぞれが自律した存在として関係を取り結ぶことは、ギデンズの構造化理論のように、社会構造とエイジェンシーがそれぞれ「相互に相手があって初めて存在できる」というものではないということの意味している（ダナーマーク 2015, 268 頁）。構造化理論のような認識を行うならば、社会構造とエイジェンシーは同一過程に属する二つの要素となり、社会システムは両者が相互に構成し合う関係の中で成立することになる。ここでは、社会構造とエイジェンシーは分離不可能な二つの構成要素として認識されている。批判的実在論のように社会構造とエイジェンシーを独自の存在として認識するならば、社会システムはそれぞれ創発的性格を持つ相互作用の中で成立しているということになる。両者は初めから分離・独立しているものであり、融合することなどできない実在である。エイジェンツが社会構造に働きかけるという行為は、それによって社会が創出されるということの意味するものではない。エイジェンツにできるのは、それを再生産・変形したり、維持することだけである。社会構造とエイジェンシーを相互に構造化していると見るのか、相互作用として見るのかは、中心的合成理論と批判的実在論の決定的な違いである。

第 2 図 バスカーの社会活動の転態モデル（及びアーチャーの分析的二元論）



だがこの図は、社会システムの構造を描いてはいても、社会構造を時間軸の中で、すなわち歴史性を入れた説明を欠いているために、社会は何故先在するのかという先の問いに直接答えていない欠点を抱えている。社会活動の転態モデルは、「社会形態の先在性、すなわち社会形態が人間の活動に先立って事前的に存在することはそれらが科学的探究の対象物として自律的に存在している証である」という前提の上で描出されているにすぎない。社会の先在性を言うためには、このモデルに時間軸を入れた歴史性を加えた考察が必要となる。

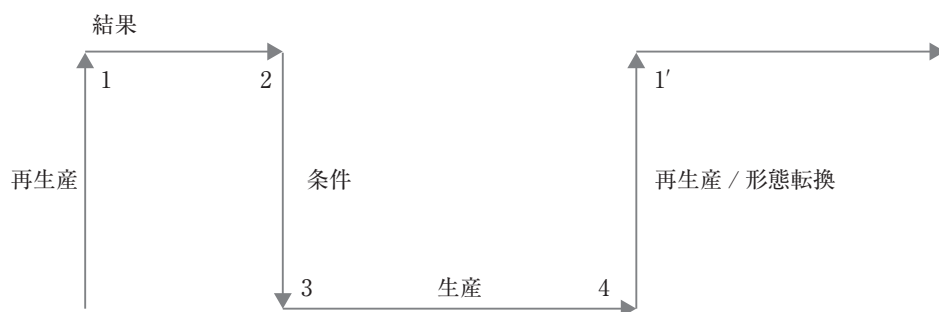
社会—エイジェンシー関係を歴史性の中で考察しようとすることは、言い換えれば、両者の関係を現在時制の問題としてとらえてはならないこと、すなわち過去からの継承の問題として現在をつかまえないければならないことを意味している。第 3 図にあるように、バスカーはこの点を『実在の再生』(2002) の中で指摘している。この図の 1 及び 1' は意図せざる結果を、2 は未承認のままにある条件を、3 は未承認のままにある動機を、4 は暗黙のスキルを表わしている。

社会構造が先在しているというのは、過去の（歴史的な）社会活動の再生産機能の結果として生まれた 1 の時点が、2 の時点に移行することで社会的エイジェンツと向かい合っている（条件づけられる）からである。社会構造を現在時制で切り取るのは 2 から 4 の一連の過程においてである。3 から 4 にかけて行われる社会構造の生産過程は、社会的エイジェンツとの相互作用を通じて新たな社会構造として再生産 / 形態変化され、1' に辿り着くことでひとつのサイクルが終了することになる。

アーチャーは、「構造とエイジェンシーが異なる時間的な周期にわたって作用するという形態生成論アプローチの議論は、……構造は必然的に、それを形態転換する（諸）行為に先行するという命題と、構造的なエラボレーションは必然的にそれらの諸行為に後行するという命題である」と述べ、この点を第 4 図にまとめている。

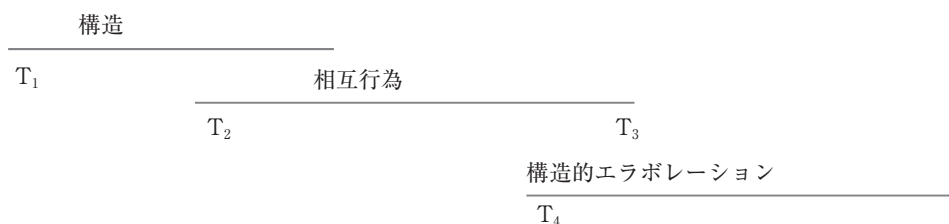
この図の最も大事な点は、 T_2 の時点で始まる社会構造とエイジェンシーとの相互行為の前に、それに先行して T_1 の時点で構造が確立されていること、逆言すれば、構造は社会的行為が行われるときの前提条件や文脈となっていることである。このことは、社会構造とエ

第3図 構造と実践



（出所） Roy Bhaskar, *Reclaiming Reality*, 1989, Verso, p. 94.

第4図 形態生成の経過



（出所） マーガレット・アーチャー『実在論的社会理論』（佐藤春吉訳），108頁。

イジェンシーとの相互行為が行われるとき、エイジェンシーに構造的負荷がかかっていることを意味している。相互行為に参加するエイジェンツは社会構造によって地位や身分、資源配分が決められており、既得利害に拘束された存在である。しかもこの不平等な状況は社会構造の沈殿作用によって長期間維持され、エイジェンツが自由な行為主体として相互作用に登場することはほとんどない。

3 実在するエイジェンシー

エイジェンツもまた自律した社会的実在である。バスカーはこの点について、「人間をめぐる問題に目を転じると、人間の最も顕著な特徴はその目的意識性である」と述べている。人間を自律した社会的実在として措定しているのはこのように、人間の目的意識性である。人間活動の帰結がここで直接問題になっているのではない。人は核家族を維持するために結婚するわけではなく、資本主義経済を存続するために労働者として働いているわけでもない。このことから、人間活動の帰結が偶然的なものでしかないことがわかる。先の社会活動の転態モデルに従うならば、2を起点に3から4を通じて1'に至る一連の相互作用の過程で、3から4の生産過程を意識的、4から1'の再生産／形態転換過程を無意識的というように、人間主体の心性を区分していることである。人間活動の帰結が問題ではないというのは、

1 や 1' の結果が「意図せざる結果」であるということを指している。

バスカーは、「私が腕を上げたという事実から私の腕が上がったという事実を除いたとして、その後には何が残るだろうか」と問いかけ、これに対する自然の答は、「私がそれを意図して行ったこと」だと述べている。友達に挨拶することを意図して手を上げたのかもしれない。しかし、そのことによって、意に反してタクシーが止まってしまったとしたらどうだろうか。この例が問題にしているのは、行為者の意図とその帰結の関係である。この例のように、行為意図と予想する帰結が直接つながらなくてもかまわない。何故ならここで問題になっているのは、目的意識性の理解、すなわち友達に挨拶しようと手を上げたという事実だけが重要だからである。しかし、この例には補足が必要である。次の例から見てみよう。

1 私はアイスクリームを食べたいと望んでいる（=ある人 A は P を望んでいる）

2 私はアイスクリームスタンドでお金を払えば、アイスクリームを食べることができると信じている（=A は Q を、すなわち X をすることによって、P が実現すると信じている）

3 それゆえ、私はアイスクリームスタンドでお金を払った（=A は X を行った）

行為者である私は、アイスクリームを食べる意図をもってお金を払い、アイスクリームを実際に手に入れたという例である。しかし、この例では、目的を実現する上で生じるかもしれない妨害要因については何も述べられていない。たまたま、家に財布を置き忘れたためにお金を持っていない場合や、失業中でアイスクリームを買うお金がない場合である。この場合、上記 3 の記述は、次のように再記述される。

3' 私は、お金を払おうとした（=A は X をしようとした）

或いは、アイスクリームが売れ切れてしまったとか、機械の故障でアイスクリームを作れなかったために、食べることができなかったこともあるかもしれない。つまり、行為者の意図性はエイジェンシーの期待を表わしてはいても、複数の要因が絡み合い、アイスクリームを食べることも、食べることができないことも十分にありえることになる。

この例から学ぶべき大事な点は、エイジェンツの目的意識性が、目的を実現する過程で、様々な障害によって翻弄されてしまう可能性が常に隠されていることである。社会活動の転態モデルでは、2 と 3 はそれぞれ、「承認されていない条件」とそこから派生する「承認されていない動機」というように、「意図せざる」結果を「承認されていない」ままエイジェンツが引き取っていることが含意されている。

それでは、以上みてきた批判的实在論を基礎に、社会的質研究はどのような理論構成をと

っていただろうか。次節以下で、この点を中心に見ていくことにしよう。

参 考 文 献

- Abbott et. al. (2016), *The Decent Society Planning for Social Quality*, Routledge.
- Archer Margaret (1996), *Culture and Agency*, Cambridge UP.
- Do. (2000) *Being Human The Problem of Agency*, Campridge UP.
- Do. (2002), Realism and Problem of Agency, *Journal of Critical Realism*, 5-1.
- Do. (2003), *Structure, Agency and the Internal Conversation*, Cambridge UP.
- Archer Margaret et. al. (ed.) (1998), *critical realism Essential Readings*, Routledge.
- Bhaskar, Roy (1979), *The Possibility of Naturalism*, Routledge.
- Do, (1994), *Pato ETC*, Verso.
- Do. (2002), *Reflections on Meta-Reality*, Sage.
- Do. (2007), *Making our Way through the World*, Campridge UP.
- Do. (2009), *Scientific Realism and Human Emancipation*, Routledge.
- Beck, Wolfgang et. al. (eds.) (1997), *The Quality of Europe*, Kluwer Law International.
- Beck, Walfgang et. al. (2001), *Social Quality: Vision for Europe*, Kluwer Law International.
- Collier, Andrew (1994), *Critical Realism An Introduction to Roy Bhaskar's Philosophy*, Verso.
- Glatzer, Wolfgang et. al. (ed.) (2004), *Challenges for Quality of Life in the Contemporary World*,
Kulwer Academic Publishers.
- Hartwig, Mervyn (2007), *dictionary of critical realism*, Routledge.
- Do. (2006), Social Quality-Opening Individual Well-being for a Social Perspective, European, *Journal of Social Quality*, 6-1.
- Do. (2006), Precarity-Lost Consequence of Societies that Lost the Social, *William Thompson Working Papers*, 3.
- Do. (2006), *Human Beings*, Nova.
- Herrmann Peter (2007), *Social Professional Activities and the State*, Nova.
- Do. (2007), Social Empowerment – A Matter of Enabling Society to Cope with Personalities, *William Thompson Working Papers*, 5
- Do. (2009), *Social Quality Looking for a Global Social Policy*, Europaischer Hoch Schul Verlag.
- Do. (2010), Social Quality -Social Policy and Beyond, *William Thompson Working Papers*, 19.
- Do. (2012), Economic Performance, Social Progress and Social Quality, *International Journal of Social Quality*, 2 (1).
- International Association on Social Quality (IASQ) (2020), *Elaboration of the Theory of Social Quality*.
- Do (2013), *Four Stages of Social Quality Thinking*.
- Hu, Xiaoti (2018), Methodological implications of critical realism for entrepreneurship research, *Journal of Critical Realism*, 17-2.
- Lin, Ka and Herrmann, Peter (2015), *Social Quality Theory*, Beghahn.
- Phillips David (2006), *Quality of Life*, Routledge.
- Van der Maesen, Laurant et. al. (2012), *Social Quality From Theory to Indicators*, Palgrave.

- Slife, Brent (2013), Taking Practice Seriously: Toward a Relational Ontology, *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology*, 24-2.
- European Foundation on Social Quality (2001), *Annual Report 2000*.
- Walker, Alan and van der Maesen, Lauraent (2001), *Social Quality and Quality of Life*, Kluwer Law International.
- M.Zachriadis et. al. (2013), Methodological implications of critical realism for mixed-methods research, *MIS Quarterly*, 37 (3), Figure 2.
- アーチャー, マーガレット (2007)『実在論的社会理論 形態生成論アプローチ』(佐藤春吉訳), 青木書店
- 飯沼守彦 (2019)「批判的実在論と研究方法論」『第 10 回横幹連合カンファレンス』
- 伊賀光屋 (2012)「批判的実在論の方法論」『新潟大学教育学部研究紀要』5 巻 1 号
- ジャン, カールソン (2016)「社会構造とエイジェンシー」『立命館産業社会論集』51 巻 4 号
- 木田融男 (2016),「批判的実在論とリトロダクションー社会科学方法論の比較からー」『立命館産業社会論集』51 巻 4 号
- 同 (2017)「批判的実在論とリトロダクション/リトロディクションー複合決定と複線の視点に関わらせて」『立命館産業社会論集』53 巻 1 号
- 榊原研互 (2008)「超越論的実在論の批判的検討ーR. バスカーの所説を中心にー」『三田商学研究』51 巻 4 号
- 佐藤春吉 (1995)「批判的実在論のプロブレマティック」季刊『思想と現代』40 号
- 同 (2008)「存在論からの社会科学の刷新ー批判的実在論を参照点にしてー」『唯物論と現代』40 号
- 同 (2012)「批判的実在論 (critical realism) と存在論的社会科学の可能性」唯物論研究協会編『唯物論研究年誌〈いのち〉の危機と対峙する』第 17 号
- 同 (2016)「『批判的実在論』の哲学的特徴とその意義」唯物論研究協会第 39 回研究大会 第 3 分科会「実在論の現在」
- セイヤー, アンドリュウ (2019)『社会科学の方法 実在論的アプローチ』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版
- 曾國哲・岸保行 (2020)「批判的実在論が捉える「科学的発見」と「もっともらしい説明」ー客観性と主観性の対立を乗り越えた先にある科学研究のメタ理論と方法論ー」『新潟大学経済論集』110 号
- 田口富久治 (1990)「社会科学方法論の基本課題ーロイ・バスカーの所説に寄せてー」『名古屋大学法政論集』130 号
- ダナーマーク, バース他 (2015)『社会を説明する 批判的実在論による社会科学論』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版
- 中澤平 (2016)「メカニズムの発見およびその同定基準について」『立命館産業社会論集』51 巻 4 号
- バスカー, ロイ (2006)『自然主義の可能性ー現代社会科学批判ー』(式部信訳), 晃洋書房
- 同 (2009)『科学と実在論』(式部信訳), 法政大学出版局
- 同 (2015)『弁証法 自由の波動』(式部信訳), 作品社
- バーガー, ピーター・ルックマン, トーマス (1977)『現実の社会的構成』(山口節郎訳), 新曜社

社会的質研究の理論的基礎：批判的實在論（1）

同（2016）「批判的實在論への導入」『立命館産業社会論集』51 巻 4 号

フィリップス，デイヴィッド（2011）『クオリティ・オブ・ライフ—概念・政策・実践』（新田功訳），人間の科学社

福士正博（2009）「社会的質が問いかけるもの」『完全従事社会の可能性』所収，日本経済評論社

同（2011）「都市という「世界」—社会的質と社会的プレカリティ概念を中心として—」『歴史と経済』211 号

同（2011）「社会的質と社会的経済の接合点」大沢真理編著『社会的経済が拓く未来』所収，ミネルヴァ書房

松森武嗣（2021）『初学者のためのアーチャー實在論的社会理論の要諦—社会科学基礎理論の可能性』ブイツーソリューション

米盛裕二（2007）『アブダクション—仮説と発見の論理』勁草書房

ローソン，トニー（2003）『経済学と實在』（八木紀一郎監訳），日本評論社